

比翼の束 第七十三回

ひよく たばね

二つのことを伝えたい

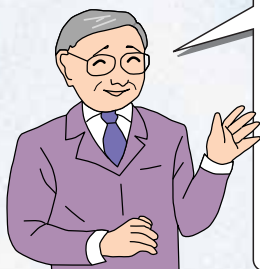
青年時代ともに過ごした友の訃報が多くなった。音信が絶えてしまった友もいる。

先日、入院中の同級生を見舞った。彼は一流大学を出て、一流企業に就職した。若くして結婚し、息子と娘を持つ父である。

在職中は毎日遅くまで残業し、出張も多く家庭のことは奥さんに任せ、ひたすら会社のために働いた典型的な会社人間であった。

このような生活であったので、二人の子どもと接触する時間は極端に少なく、家庭での団らんなどあまり覚えが

私(市長)の思いや願いなどを市民の皆さんにお伝えします。



ないとのことである。

死が近いことを自覚しはじめると、誰でもこれまでの人生を振り返り、生きてきた意味を探り、自分が大切にしてきたものの価値観を再吟味するのであろう。

「自分は、人生の価値観を仕事に置いてきた。そして自分なりに仕事の面ではよくやったと思っている。ただ、二人の子どもは家内に任せきりだったし、私の心は、子どもに向いていなかった。たまに顔を合わせると、ちゃんと勉強しているかときつく言っただけだった。子どもは懸命に働いている父親の背中を見て、素直に育ってくれるものと勝手に思っていた。しかし、死を前に、独善的であった自分のことがやつとわかった。子どもたちには本当に申し訳なかった。妻にも、もつともつと優しくすべきだった。何とか謝って死にたいと思う……。」としみじみと話してくれた。

私自身のこれまでのことを重ね合わせて、寂しい思いで病院をあとにした。日頃は多忙さのあまり、自分をしみじみと振り返り、考えることがなかったような気がする。

私自身の日頃の反省を含めて、「あたりまえ」を見なおすこと、「過ち」はすぐに認めること、この二つのことを伝えたい。

私たちは、「あたりまえ」のことで、それに対する感謝の心を忘れがちである。あたりまえのことが、どれほどありがたいことなのか、身をもって知らされるのは親を亡くした時である。あるべきものが、あるべきようにある。まさにこれが「あたりまえ」の姿である。

今ここにあるあたりまえのことに、どれほど自分が支えられているのか、どれほど癒されたり、励まされたり、勇気づけられたりしているか。日常生活の中で、なにげなく思い過ごしている「あたりまえ」のことに思いをいだかなければならない。

次に、「過ちはすぐに認める」ということである。自分の犯した過ちを、素直に認めることができないのが人の常である。

私たちは家族、兄弟、親戚、さらには友達、仕事や地域社会の人達とさまざまな人間関係の中で生きている。しかも、それぞれの人達とこれまでさま

ざまな歴史を刻んできた。長いつきあいのなかでは、ちよつとした感情の行き違いや言葉のやりとりで、気まずい思いをしたり信頼関係を損なってしまうこともある。

そんな時に肝心なのは、その後の対応、事後処理である。これを誤らせつかくの絆も信頼関係も失うことになってしまう。

謝罪の鉄則は、すぐに、直接謝ることである。自分の心からの気持ち、思いをきちんと相手に伝えることである。メールや電話などでは、謝罪の心をどれだけ受けとめていただくことができないだろうか。

謝罪だけではない、感謝の気持ち、感動の心、相手を思いやる気持ちは、直接会って伝えることである。表情や心は、その時のふるまいなどが一体となつてはじめて伝わるのであろう。

自らの罪を、過ちをすぐに認め、謝ることは、なかなかできないのだが、素直な自分になることで、かえって心が軽くなるものだ。